

資料

聴覚障害学生支援活動における支援学生の行動意図の規定因

溝曾路 哲也*・河内 清彦**

本研究では聴覚障害学生支援活動における支援活動の行動意図に関連する要因を検討した。A大学の聴覚障害学生の支援グループに所属する支援学生56名を対象に質問紙調査を行った。その結果、聴覚障害学生支援活動においても、妹尾(2001)の概念モデルがあてはまった。すなわち、支援学生は自分の援助の効果について肯定的な認識を得ることで援助成果を認識し、支援活動への行動意図が強められていた。さらに、支援グループへの効果認識と支援活動を継続する意図が関連を示し、また、支援グループへの帰属意識の高い学生ほど、支援活動を積極的に行う意図や、卒業後も聴覚障害児・者への支援活動に関わろうとする意図が強かった。このことから、実践においては、支援学生が自分の行動が聴覚障害学生や支援グループの役に立っていると実感できるような配慮が有効であると考えられた。

キー・ワード：聴覚障害学生支援 ボランティア活動継続の動機づけ 援助成果 組織への帰属意識

I. 問題と目的

1. 聴覚障害学生支援における課題

現在、全国の大学には聴覚に障害のある学生(以下、「聴覚障害学生」という)が多数在籍している(日本学生支援機構, 2013)。聴覚障害学生の大学生活において最も大きな問題になるのが授業場面での情報保障であり、情報保障においては、ボランティアの学生(以下、「支援学生」という)が支援者をしている大学が多い(日本学生支援機構, 2013)。

しかし、1名の聴覚障害学生が確実に情報保障を受けるためには、最低でも20~30名の支援学生が必要であり(日本学生支援機構, 2006)、支援学生が十分に確保されている大学はほとんどない(日本学生支援機構, 2005)。支援学生が不足する原因の一つに、支援学生が

活動を継続できないという点があげられる。そのため、聴覚障害学生が安定して情報保障を受けられるためには、支援学生が活動を継続できる環境を整える必要がある。

2. 援助成果のモデル

ボランティア活動の継続と関連する心理プロセスについて、妹尾(2001)は、援助成果という観点からモデルを提案している(本研究ではこれを「援助成果のモデル」という)。援助成果とは、「向社会的行動において、他者との相互作用を通じて、援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬」(妹尾, 2001)と定義され、妹尾(2001)によると、援助行動を行うことによって、自分の援助が有効であったかどうかという援助の効果認識が生じ、援助者は、行った援助が有効であったと肯定的に認識すれば、援助成果を得る。そして、援助成果が得られれば、次の援助行動が動機づけられる。すなわち、援助の行動意図が強化される。

* 元筑波大学大学院人間総合科学研究科

** 筑波大学

援助成果のモデルは、ボランティア活動を行う中高年（妹尾・高木，2003）や、専門学校生（妹尾，2008）を対象とした研究によって実証されており、聴覚障害学生への支援活動においてもあてはまる可能性がある。

3. ボランティア組織への帰属意識

ボランティア活動の継続と関連する要因として、もう一つ、ボランティア組織への帰属意識があげられる。聴覚障害学生への支援活動は多くの支援学生を必要とするため、支援学生が組織を形成して活動を行う場合がある。集団で行われるボランティア活動においては、組織への帰属意識の強いメンバーほど、ボランティア活動を継続する気持ちが強いことが明らかにされており（安藤・広瀬，1999；Grube and Piliavin, 2000；Omoto and Snyder, 1995；Simon, Stürmer and Steffens, 2000）、このことから、支援組織への帰属意識の強い学生ほど、支援活動を続けようとする気持ちが強いと考えられる。

4. 目的

本研究では、聴覚障害学生が安定して情報保障を受けられる環境を整える際に参考となる基礎的な知見を得るため、支援学生における、支援活動への行動意図と関連する要因を明らかにすることを目的とする。具体的には、聴覚障害学生への支援活動においても援助成果のモデルがあてはまるのかどうかを検討する。すなわち、援助の効果認識によって援助成果がもたらされ、行動意図が強化されるかどうかを検討する。また、帰属意識などの要因も含めて、行動意図と関連する要因について検討を行う。

II. 方法

1. 調査対象者

2009年度にA大学の聴覚障害学生を支援するグループ（以下、「支援グループ」という）に所属していた学生105名に調査協力を依頼し、そのうち56名（男性13名、女性43名）から回答が得られた。回答者の平均年齢は20.8歳（SD1.4歳）であった。

2. 手続き、および倫理的配慮

2009年5～11月に質問紙を封筒に入れて個別に配布し、回答後、封をした質問紙を支援グループの控え室に設置した回収箱に入れてもらった。なお、質問紙の表紙には、記入済みの質問紙は研究目的のみに使用すること、調査は無記名で行い、個人が特定されることはないこと、質問紙は慎重に保管すること、回答をもって調査に同意したとみなすことなどを明記した。

3. 質問紙の構成

(1) 援助の効果認識：自分の行動が聴覚障害学生の役に立っているという認識（以下、「援助効果」という）、および、自分の行動が支援グループの役に立っているという認識（以下、「グループ効果」という）について、Grube and Piliavin (2000)、妹尾・高木 (2003) を参考に設問を2項目ずつ作成した (Table 1)。回答形式は、「全くあてはまらない」(1点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「どちらかといえばあてはまらない」(3点)、「どちらかといえばあてはまる」(4点)、「どちらかといえばあてはまる」(5点)、「ややあてはまる」(6点)、「非常にあてはまる」(7点) の7件法であった。

なお、援助効果、グループ効果に含まれる項目について、それぞれ主成分分析とCronbachの α 信頼性係数の算出を行ったところ、いずれの場合も内的一貫性が確認された (Table 1)。

(2) 援助成果：支援活動をすることで、人間関係が広がったり、深まったりしたという援助成果（以下、「人間関係」という）、および、支援活動をすることで、学生生活が充実したと感じたり、自分自身により変化を感じたりしたという援助成果（以下、「自己の強化」という）について、妹尾・高木 (2003) や高口・田中・吉原 (2005) を参考に設問を5項目ずつ作成した (Table 2)。回答形式は、「全くあてはまらない」(1点) から「非常にあてはまる」(7点) の7件法であり、十分な内的一貫性が確認された (Table 2)。

聴覚障害学生支援活動における支援学生の行動意図の規定因

Table 1 援助の効果認識に含まれる項目の主成分分析結果、平均値、標準偏差および α 係数 (n = 56)

	項目	第 I 主成分負荷量	平均値	SD
援助効果	私の通訳は、聴覚障害学生が授業を理解するのに役立っている。	.884	5.41	0.87
	私の通訳は、聴覚障害学生が授業に参加するにあたって、大切である。	.884	5.23	0.95
		固有値		1.56
		第 I 主成分寄与率 (%)		78.15
		α 係数		.72
グループ効果	私が通訳者をしていることは、通訳者派遣できない講義をなくすために役立っている。	.910	5.32	1.28
	私が支援学生をしていることは、支援グループの活動の役に立っている。	.910	5.21	1.02
		固有値		1.66
		第 I 主成分寄与率 (%)		82.75
		α 係数		.78

Table 2 援助成果に含まれる項目の主成分分析結果、平均値、標準偏差および α 係数 (n = 56)

	項目	第 I 主成分負荷量	平均値	SD
人間関係	支援活動を通して、仲の良い友だちができた。	.927	5.36	1.51
	支援活動を通して、自分とは異なる学部・学科 (研究科・専攻) の友だちができた。	.793	5.75	1.43
	支援活動を通して、自分とは異なる学年の人と仲良くなれた。	.779	6.00	0.95
	支援活動を通して、何でも話し合える相手が得られた。	.636	3.63	1.81
	支援活動を通して、以前からの友だちと、より親密になれた。	.543	4.66	1.69
		固有値		2.80
		第 I 主成分寄与率 (%)		55.89
自己の強化		α 係数		.77
	支援活動をすることで、学生生活がより充実したものになった。	.854	5.45	1.43
	支援活動にやりがいを感じた。	.846	6.07	1.02
	支援活動を通して、自分自身が成長できた。	.761	5.73	1.15
	支援活動をするなかで、通訳技術を高めたいと思うようになった。	.758	6.36	0.80
	支援活動を通して、自分が他者に必要とされていると実感できた。	.626	5.14	1.38
		固有値		3.05
		第 I 主成分寄与率 (%)		60.98
	α 係数		.82	

(3) 行動意図：情報支援活動¹⁾を継続する意図 (以下、「活動継続意図」という)、情報支援活動のみならず、支援グループの運営を行うなど、積極的に支援活動に関わろうとする意図 (以下、「グループ活動意図」という)、および、大学を卒業・修了しても聴覚障害児・者への支援活動を行おうとする意図 (以下、「支援継続意図」という) について、Abrams, Ando and Hinkle (1998)、安藤・広瀬 (1999)、および、妹尾・高木 (2003) を参考に項目を作成した (Table 3)。回答形式は、「全くあてはまらない」(1点) から「非常にあてはまる」(7点) の7件法であり、十分な内的一貫性が確認された (Table 3)。

(4) 帰属意識：支援グループへの帰属意識 (以下、「帰属意識」という) について、唐沢 (2001) を参考に5項目を作成した (Table 4)。回答形式は、項目1～3は「全くあてはまらな

い」(1点) から「非常にあてはまる」(7点) の7件法、項目4は「支援活動に関わっていない人のほうが明らかに多い」(1点) から「支援チームのメンバーのほうが明らかに多い」の7件法、そして、項目5は「全くいない」(1点) から「たくさんいる」(7点) の7件法であった。また、十分な内的一貫性が確認された (Table 4)。

(5) フェイスシート：受講した養成講座の種類 (手書き要約筆記、パソコン要約筆記、手話通訳) と受講した時期、現在、情報支援活動を行っている頻度、支援グループの運営スタッフ経験、年齢、性別、所属学部・学科 (研究科・専攻) の記入を求めた。また、養成講座を受講した時期をもとに支援活動を行なっている期間 (以下、「活動期間」という) を算出し、分析に使用した。

Table 3 行動意図に含まれる項目の主成分分析結果、平均値、標準偏差および α 係数 (n = 56)

項目		第 I 主成分負荷量	平均値	SD
活動継続意図	私は、今年度の2学期に、週に1回以上通訳に入りたい。	.918	5.66	1.77
	私は、卒業（修了）するまで毎学期、週に1回以上通訳に入りたい。	.904	5.34	1.59
	私は、支援活動をやめることを考えている。(R) ¹⁾	.772	5.77	1.53
	固有値			2.26
	第 I 主成分寄与率 (%)			75.17
		α 係数		.83
グループ活動意図	私は、支援グループの運営スタッフとして支援活動に参加したい。	.878	3.59	1.69
	私は、養成講座 ²⁾ のスタッフとして活動したい。	.872	4.09	1.85
	私は、大学が主催する障害学生支援に関するシンポジウムの学生スタッフとして活動したい。	.840	3.48	1.41
	固有値			2.24
	第 I 主成分寄与率 (%)			74.60
		α 係数		.83
支援継続意図	私は、卒業（修了）後も聴覚障害児・者の支援活動に関わりたい。	.953	5.21	1.50
	私は、大学（院）在学中しか、聴覚障害児・者の支援活動に関わらないつもりだ。(R)	.953	5.25	1.56
	固有値			1.82
	第 I 主成分寄与率 (%)			90.75
	α 係数			.90

1) (R) は逆転項目。分析の際は得点の逆転修正を行った。

2) 新規の支援学生を養成する講座であり、学生がスタッフを務める。

Table 4 帰属意識に含まれる項目の主成分分析結果、平均値、標準偏差および α 係数 (n = 56)

項目		第 I 主成分負荷量	平均値	SD
帰属意識	1. 私が学生生活を送る上で、支援グループは大切な存在である。	.813	5.02	1.47
	2. 私は、支援グループに愛着を感じている。	.794	5.00	1.44
	3. 私は、普段の会話のなかで、支援活動のことをよく話題にする。	.655	4.00	1.63
	4. あなたが日頃、よく会話をする友だちは、支援活動に関わっていない人と、支援グループのメンバーでは、どちらが多いですか。	.628	3.00	2.15
	5. あなたの考えや行動に影響を与えた人は、支援グループのメンバーのなかにどのくらいいますか。	.626	5.43	1.62
	固有値			2.51
	第 I 主成分寄与率 (%)			50.11
	α 係数			.73

4. 分析に用いたデータ

以降の分析では、それぞれの項目の合計得点を尺度得点として用いた。

Ⅲ. 結果

1. 変数間の相関

分析で用いる変数について、変数間のピアソンの相関係数を Table 5 に示した。

援助の効果認識と援助成果との関連については、援助効果と「自己の強化」、グループ効果と「人間関係」、「自己の強化」との間に中程度の有意な正の相関を示した。

援助成果と行動意図の関連については、「人間関係」とグループ活動意図、支援継続意図、「自己の強化」と支援継続意図との間に中程度の有意な正の相関を示した。

行動意図と最も強い関連を示した変数は、活動継続意図についてはグループ効果であり、中程度の有意な正の相関を示した。グループ活動意図、支援継続意図については帰属意識であり、中程度の有意な正の相関を示した。

帰属意識は、援助成果の「人間関係」とは強い有意な正の相関、「自己の強化」とは中程度の有意な正の相関を示した。

活動期間と行動意図との関連については、活動期間と活動継続意図との間に弱い有意な負の相関がみられた。これは、活動期間の長い支援学生の多くは上級生であることから、上級生は就職活動や研究のため、情報支援活動を実施しづらいということを意味していると考えられる。一方、活動期間と支援継続意図との間には弱い有意な正の相関がみられ、活動を長く続け

聴覚障害学生支援活動における支援学生の行動意図の規定因

Table 5 支援活動に関わる変数間の相関係数

	援助の効果認識		援助成果		行動意図			8
	1	2	3	4	5	6	7	
1. 援助効果								
2. グループ効果	.61 **							
3. 人間関係	.39 **	.43 **						
4. 自己の強化	.69 **	.65 **	.63 **					
5. 活動継続意図	.30 *	.49 **	.12	.32 *				
6. グループ活動意図	.22	.28 *	.43 **	.38 **	.34 **			
7. 支援継続意図	.37 **	.42 **	.46 **	.54 **	.19	.31 *		
8. 帰属意識	.42 **	.40 **	.71 **	.67 **	.18	.46 **	.60 **	
9. 活動期間	.23	.15	.46 **	.31 *	-.28 *	-.15	.34 **	.41 **

** $p < .01$, * $p < .05$

ている支援学生ほど、卒業後も聴覚障害児・者への支援活動を行おうとする気持ちが強くなっていた。

2. 援助成果を決定する要因

まず、援助の効果認識が援助成果に及ぼす影響を検討するために、援助成果を従属変数とし、援助効果、グループ効果を独立変数とする重回帰分析を行った。分析は変数増減法を用い、偏回帰係数の有意性5%を基準に変数を投入し、10%を基準に変数を除去した。なお、以降の重回帰分析はすべて、同様の方法で行った。分析の結果をTable 6に示す。

「人間関係」については、グループ効果のみが選択された。このことから、自分の行動が支援グループの役に立っていると認識している支援学生ほど、人間関係が広がったり、深まったりしたと認識していた。

Table 6 援助成果を従属変数とした重回帰分析結果

	人間関係	自己の強化
援助効果	-	.46 **
グループ効果	.43 **	.37 **
決定係数	.17	.54
F値	12.56 **	33.34 **

** $p < .01$, * $p < .05$

数値は標準偏回帰係数

一方、「自己の強化」については、援助効果、グループ効果ともに有意な説明変数となり、決定係数も.05以上という十分な値(大六, 2009)が得られた。より高い標準偏回帰係数を示したのは援助効果であり、自分の行動が聴覚障害学生の役に立っていると認識している支援学生ほど、支援活動をすることで学生生活が充実したと感じたり、自分自身により変化が生じたと認識したりしていた。

3. 行動意図を決定する要因

(1) 援助成果モデルからの検討：援助成果が行動意図に及ぼす影響を検討するために、行動意図を従属変数とし、援助成果を独立変数とする重回帰分析を行った。その結果をTable 7に示す。

活動継続意図については、「自己の強化」のみが選択され、支援活動をすることで、学生生活が充実したと感じたり、自分自身により変化が生じたと認識したりしている支援学生ほど、情報支援活動を続けようとする気持ちが強くなっていた。

グループ活動意図については、「人間関係」のみが選択され、支援活動をすることで、人間関係が広がったり、深まったりしたと認識している支援学生ほど、積極的にグループ活動に関わろうとする気持ちが強くなっていた。

支援継続意図については、「自己の強化」の

Table 7 行動意図を従属変数、援助成果を独立変数とした重回帰分析結果

	活動継続意図	グループ活動意図	支援継続意図
人間関係	-	.43 **	-
自己の強化	.31 *	-	.54 **
決定係数	.08	.17	.27
F 値	5.99 *	12.08 **	21.62 **

** $p < .01$, * $p < .05$

数値は標準偏回帰係数

みが選択され、支援活動をすることで、学生生活が充実したと感じたり、自分自身により変化が生じたと認識したりしている支援学生ほど、大学を卒業・修了しても聴覚障害児・者への支援活動を続けようとする気持ちが強くなっていた。

全体を通してみると、いずれも決定係数は低いものの有意であり、行動意図は援助成果の影響を受けていることが示された。

(2) すべての変数による検討：次に、行動意図に影響を及ぼす要因を検討するために、行動意図を従属変数とし、その他のすべての変数を独立変数とする重回帰分析を行った。その結果を Table 8 に示す。

活動継続意図については、グループ効果のみが選択され、自分の行動が支援グループの役に立っていると認識している支援学生ほど情報支

援活動を続けようとする気持ちが強くなっていた。

グループ活動意図、支援継続意図については、帰属意識のみが選択され、支援グループへの帰属意識の強い支援学生ほど、積極的に支援活動に関わろうとする気持ちや、大学を卒業・終了しても聴覚障害児・者への支援活動を続けようとする気持ちが強くなっていた。

全体を通してみると、いずれも決定係数は有意であり、また、援助成果のみを独立変数とした場合と比べて、値が高くなっていた。

IV. 考察

1. 援助成果モデルの検討

本研究ではまず、妹尾（2001）の援助成果モデルが聴覚障害学生への支援活動においてもあてはまるのかどうかを検討した。その結果、援

Table 8 行動意図を従属変数、その他の変数を独立変数とした重回帰分析結果

	活動継続意図	グループ活動意図	支援継続意図
援助効果	-	-	-
グループ効果	.49 **	-	-
人間関係	-	-	-
自己の強化	-	-	-
帰属意識	-	.46 **	.60 **
活動期間	-	-	-
決定係数	.23	.19	.34
F 値	17.14 **	14.25 **	29.72 **

** $p < .01$, * $p < .05$

数値は標準偏回帰係数

聴覚障害学生支援活動における支援学生の行動意図の規定因

助の効果認識が援助成果に影響を与え、援助成果が行動意図に影響を及ぼすという、援助成果モデルと一致する結果が得られた。

特に、援助の効果認識と援助成果との関連は強く、支援学生が支援活動を通して人間関係や学生生活を豊かにするためには、自分が聴覚障害学生や支援グループの役に立っているという認識が重要であることが示された。

このことから、実践においては、支援学生のケア（日本学生支援機構, 2007）の一環として、支援学生たちが、自分の支援が聴覚障害学生や他の支援学生の役に立っていると実感できる工夫が必要である。具体的には、有効な配慮の一つとして、情報支援活動を始めて間もない支援学生と、情報支援活動に熟達した支援学生がペアを組むという方法がある。活動を始めて間もない支援学生は、情報支援技術が十分ではないが、熟達した支援学生のサポートを受けることで、より効果的な情報支援活動を行うことができる。また、熟達した支援学生の多くは学部の上級生や大学院生であるため、就職活動や研究のために、支援活動に費やせる時間が少ない。そこで、活動を初めて間もない支援学生をサポートするという役割を得ることで、自分が支援グループの役に立っていると実感できるであろう。

一方、重回帰分析の結果、いずれも決定係数（説明率）は低く、支援学生の支援活動に対する動機づけを検討する際には、援助成果以外の要因も考慮する必要があることが示された。

2. 支援活動への動機づけ

行動意図を従属変数とした重回帰分析の結果、活動継続意図と最も関連を示したのはグループ効果であり、グループ活動意図、および支援継続意図と最も関連を示したのは帰属意識であった。

活動継続意図とグループ効果が関連を示した理由を、援助成果モデルから解釈すると、自分の行動が支援グループの役に立っていると認識している支援学生は、情報支援を行おうとする気持ちが強いといえる。しかし、因果関係が反

対である可能性もある。すなわち、情報支援を行おうとする気持ちが強く、実際に情報支援活動を頻繁に行なっている支援学生ほど、自分の行動が支援グループの役に立っていると認識している可能性もあるため、因果関係の解釈には慎重になる必要がある。

グループ活動意図と帰属意識が関連を示したという結果は、安藤・広瀬（1999）と一致しており、支援学生たちは、支援グループや支援グループの他のメンバーとの間に愛着や結びつきを感じるにより、よりコストの大きい活動にも積極的に関わろうとしていた。

支援継続意図もまた、帰属意識と関連を示した。このことから、支援グループへの帰属意識の強い学生は、「聴覚障害者を支援する」という組織の価値観を自分自身の価値観として取り入れ、そのことが、支援グループが対象とする聴覚障害学生に限らず、聴覚障害児・者一般を支援しようという気持ちにつながったと考えられる。本研究では、帰属意識の規定因については検討しなかったが、安藤・広瀬（1999）は、「活動のおもしろさが帰属意識と関わっている可能性が示唆されている」と述べており、本研究でも、援助成果と帰属意識に強い相関がみられた。このことから、支援活動への効果認識が援助成果をもたらし、それが支援グループへの帰属意識につながり、支援グループへの帰属意識が、広く聴覚障害児・者を支えようという気持ちにつながった可能性がある。

援助成果以外の要因を加えた場合、援助成果は、行動意図との関連を示さなくなったが、これは、援助成果は特に帰属意識との相関が強く、その帰属意識が行動意図と強く関連したためと考えられる。

3. リミテーション

本研究では、A大学1校のみを対象とした。聴覚障害学生支援のシステムは、それぞれの大学の個性がある（日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）, 2009）ことから、本研究の知見は、A大学の特徴を大きく反映したものである点に留意する必要がある。す

なわち、A大学は大規模で先端的な支援体制が構築され、聴覚障害学生や支援学生同士の交流が活発なため、そのことが、本研究の結果に影響を与えている可能性がある。

註

1) 本稿では、「手書き要約筆記」「パソコン要約筆記」「手話通訳」によって聴覚障害学生に音声情報を伝える活動のことを、「情報支援（活動）」とした。

文献

- Abrams, D., Ando, K., & Hinkle, S. (1998) Psychological attachment to the group: Cross-cultural differences in organizational identifications and subjective norms as predictors of workers' turnover intentions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24(10), 1027-1039.
- 安藤香織・広瀬幸雄 (1999) 環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因. *社会心理学研究*, 15(2), 90-99.
- 大六一志 (2010) 第12章 相関研究法. 前川久男・園山繁樹編著, 第6巻 障害科学の研究法. 明石書店, 267-294.
- Grube, J. A. & Piliabin, J. A. (2000) Role identity, organizational experiences, and volunteer performance. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26(9), 1108-1119.
- 唐沢穰 (2001) 集団同一視尺度. 吉田富二雄編, 堀洋道監修, 心理測定尺度集〈2〉—人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉—. サイエンス社, 221-225.
- 日本学生支援機構 (2005) 大学等における障害学生の修学支援の在り方について.
- 日本学生支援機構 (2006) はじめて障害学生を受け入れるにあたって.
- 日本学生支援機構 (2007) 障害学生修学支援担当者のための事例解説 (障害学生修学支援コーディネーター養成プログラム研究会報告書).
- 日本学生支援機構 (2013) 平成24年度 (2012年度) 大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書.
- 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) (2009) 資料集 合冊 聴覚障害学生支援システムができるまで. 筑波技術大学.
- Omoto, M. A. & Snyder. M. (1995) Sustained helping without obligation: Motivation, longevity of service and perceived attitude change among AIDS volunteers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68(4), 671-686.
- 妹尾香織 (2001) 援助行動における援助者の心理的効果—研究の社会的背景と理論的枠組み—. 関西大学大学院人間科学 社会学・心理学研究, 55, 181-194.
- 妹尾香織 (2008) 若者におけるボランティア活動とその経験効果. 花園大学社会福祉学部研究紀要, 16, 35-42.
- 妹尾香織・高木修 (2003) 援助行動経験が援助者自身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られる援助成果. *社会心理学研究*, 18(2), 106-118.
- Simon, B., Stürmer, S., & Steffens, K. (2000) Helping individuals or group members?: The role of individual and collective identification in AIDS volunteerism. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26(4), 497-506.
- 高口央・田中芳則・吉原正治 (2005) 大学における障害学生就学支援の授業効果. 総合保健科学 広島大学保健管理センター研究論文集, 21, 1-6.
—— 2013.8.23 受稿、2013.12.10 受理 ——

Determinants of Intentions to Support for Students with Hearing Impairment

Tetsuya MIZORO* and Kiyohiko KAWAUCHI**

This study focused on volunteer students and explored factors that related their intention to participate in support activities for students with hearing impairment. A questionnaire-based survey was administered to 56 volunteer students at A university. The analysis of 56 questionnaires supported Senoo's (2001) conceptual model. Namely, Affirmative evaluation of their own helping behaviors provides helping effects for volunteer students and helping effects for them strengthen their behavioral intentions toward support activity. The main results were as follows; (1) affirmative evaluation of their own helping behaviors for the organization strengthen the intention to continue information support, (2) Organizational identification had a significant effect on intention to participate actively the support activity and to carry out support activities for individuals with hearing impairment after graduation.

In conclusion, it is effective to manage support activity in order to volunteer students can feel they are helpful to students with hearing impairment and their organization.

Key words: supports for students with hearing impairment, intention to continue volunteering, helping effects for helpers, organizational identification

* former Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

** University of Tsukuba